濱口梧陵と3つの「防」

千葉科学大学
危機管理学部
藤本　一雄

本日の話題

- わが国の危機管理教育の現状をみると、対象としている危機は「自然災害」がほとんど。
- わが国を取り巻く自然災害（防災）、感染症（防疫）、戦争・テロ（防衛）の危機に立ち向かった「**濱口梧陵**」の功績は、より広範な危機管理教育の有効な教材となり得る。

藤本一雄・他：危機管理教育の教材としてみた濱口梧陵の功績とその再評価、安全教育学研究、Vol.17、No.1、2017.

※笹川繁蔵（1810～1847年）

濱口梧陵

- ヤマサ醤油（本社：銚子市、創業：1645年）の第７代当主（1820年～1885年）　※広村（和歌山）、江戸（東京）、銚子（千葉）を行き来する

1855～1860年

「**安政**の江戸にだけは住みたくないなあ。**地震**だけでなく、**コレラ**がはやるわ火事は多いわ。**外国船**はやって来るし。」（宮部みゆき、2014）

提供：広川町教育委員会

梧陵さんが育った銚子

- 濱口梧陵は、1820年、紀州の広村（現在の和歌山県広川町）で生まれました。
- 家業を継ぐため、**12歳**のとき、広村から**銚子**にやって来ました。ゆくゆくは醤油屋の主人となる身でしたが、家訓にしたがい、丁稚と同じように働きました。また、学問に独学で熱心に取り組むとともに、槍、剣、柔術などの武道にも励みました。
- その後、江戸において、**佐久間象山**や**勝海舟**などとの交流を深めました。

安政東海･南海地震の津波

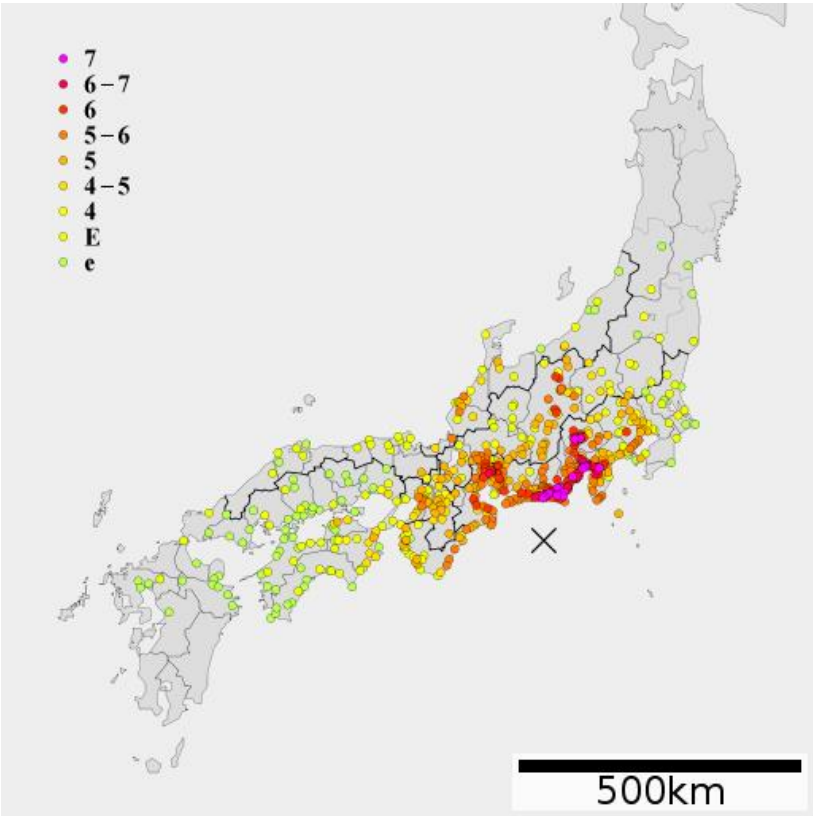
- 濱口梧陵が広村に戻っていた1854年12月23日（旧暦11月4日）の午後5時頃、**安政東海地震**が発生し、大きな揺れが広村を襲った。梧陵と村人たちは、津波を警戒して広八幡神社に避難して、一夜を明かした。
- 翌日の午後4時頃、**安政南海地震**の大きな揺れが広村を再び襲った。梧陵は、津波の襲来を予見して、村の人々に逃げるように伝えていたところ、津波に襲われて半身を波にさらわれながら、広八幡神社まで退いた。日が暮れて暗くなると、梧陵は、若者らとともに、逃げ遅れた人々の捜索に出かけた。逃げる人たちの目印にと稲わらに火をつけて、人々を高台（**広八幡神社**）へと導いた。

濱口梧陵34歳

安政東海地震（1854年）

現在の「南海トラフ地震」に相当

- 嘉永7年11月4日（1854年12月23日）に発生したマグニチュード（M）8.4の地震（死者2～3千人）
- 広村：震度4～5
- 銚子：津波高：1～2m（漁船遭難し水夫三名溺死す）

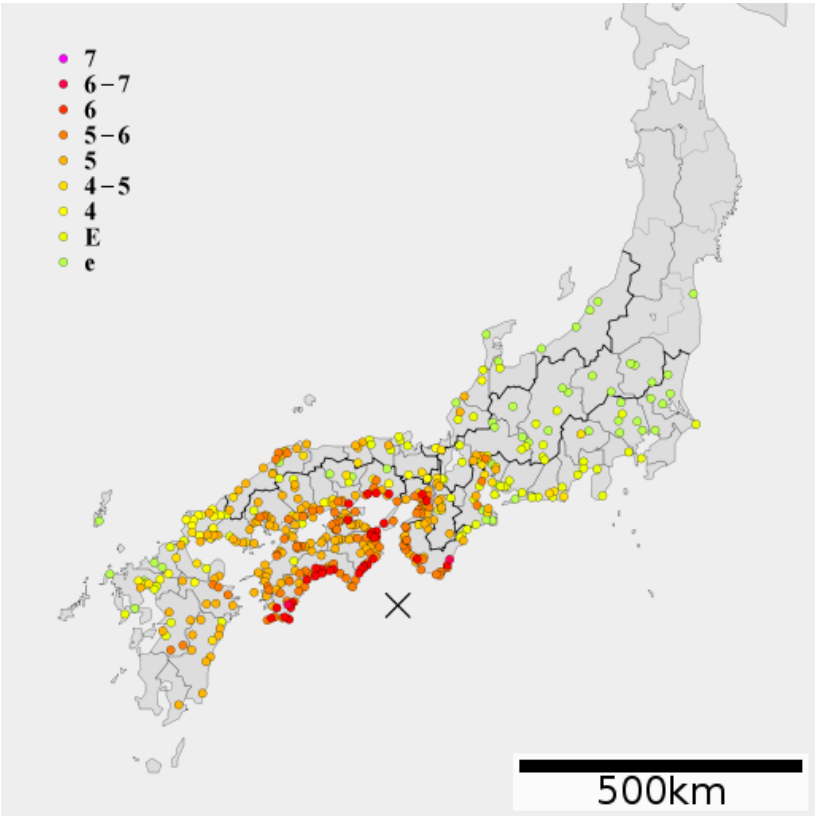


濱口梧陵34歳

安政南海地震（1854年）

現在の「南海トラフ地震」に相当

- 嘉永7年11月5日（1854年12月24日）に発生したマグニチュード（M）8.4の地震（死者数千人）　※安政東海地震の約32時間後に発生
- 広村：震度5～6、津波高：5m

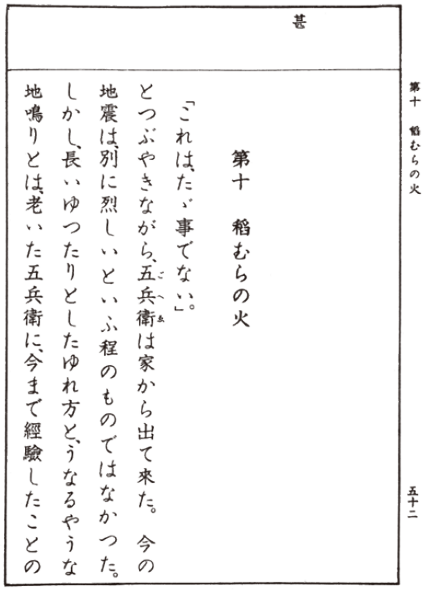


宇佐八幡神社
平成26年厄年表
男性
女性
25歳
19歳
41歳
32歳
42歳
33歳
43歳
34歳
61歳
37歳
61歳

「稲むらの火」

小泉八雲：ラフカディオ・ハーン
↓
長男：小泉一雄（カズオ）

- 後年、この話を聞いた**小泉八雲**は「生ける神（A Living God）」の題名で英語による作品を1896年に発表し、それを中井常蔵が翻訳・再話したものが文部省の教材公募に入選し、国語教科書に「**稲むらの火**」の題名で1937年から1947年まで掲載。



甚

第十　稲むらの火

「これは、たゞ事でない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出て來た。今の地震は、別に烈しいといふ程のものではなかつた。しかし、長いゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで經驗したことの

第十　稲むらの火　五十二

小學國語讀本
尋常科用
卷十
文部省

国語教科書（1937～1947年）

広村堤防の建設（1）

- 梧陵は、安政南海地震の津波から避難した後、炊き出しや被災者用の小屋の建設、農耕具・漁具の配給などの救済に取り組むとともに、津波を防ぐための堤防建設事業に取り組むことを決意。
- この事業の目的は3つあり、1. 将来の津波から村を守るため、2. 津波で職を失った村民に堤防建設の仕事を与えて生活を安定させることで、村民の流出を防ぐため、3. 重い年貢がかかる田畑を堤防の敷地として使用することで、村民の負担を軽減するため。

広村堤防の建設（2）

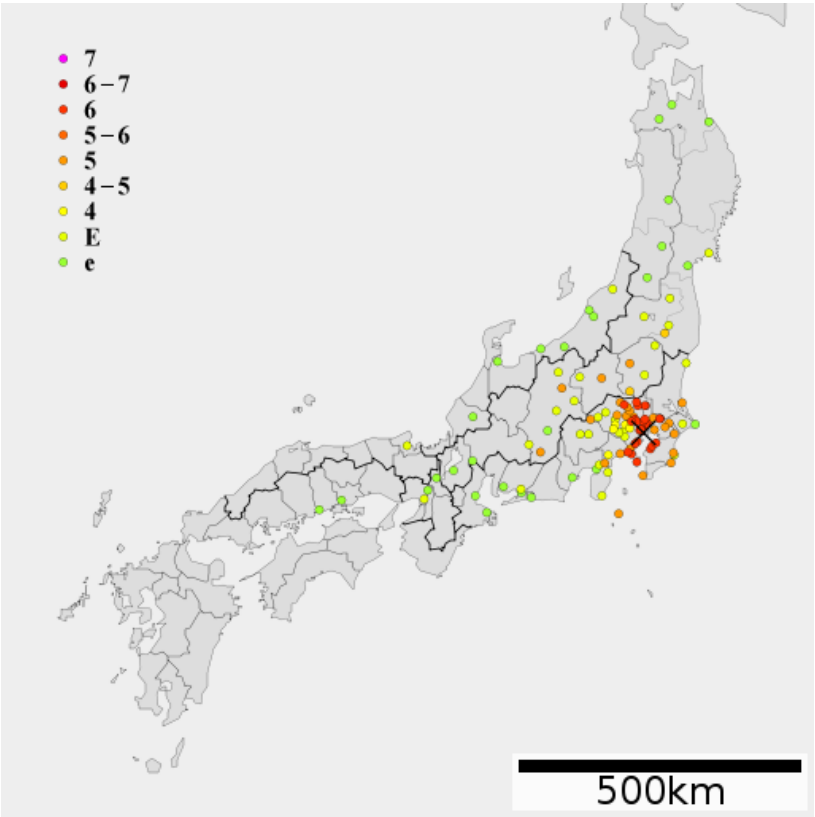
- 堤防の建設は1855年2月から開始され、その費用は、梧陵がすべて負担すると紀州藩に申し出ていたものの、1855年の安政江戸地震で江戸の店が大損害を蒙ったため、資金の調達が困難となった。
- しかし、広村の出身者が多い銚子の店では、過去最高の生産高を達成して、合計で約2000両を広村に送金した。**1858年に広村堤防（高さ5m、長さ約650m）は完成**。
- 広村堤防は、1938年、濱口梧陵墓とともに国の史跡に指定され、その後、**1944年の昭和東南海地震や1946年の昭和南海地震の津波に対しても効果**を発揮して、広村は大きな被害を免れた。

濱口梧陵35歳

安政江戸地震（1855年）

現在の「首都直下地震」に相当

- 安政２年10月２日（1855年11月11日）午後10時ごろ、関東地方南部で発生したM7クラスの地震（死者6000人余～1万人余）　※安政南海地震の約１年後に発生
- 江戸：震度６



防災面での功績（1）

- 防災意識の啓発のためによく小学校の教科書にとりあげられてきた話に、「稲むらの火」がある。･･･**危機管理**のエッセンスが詰め込まれたすばらしい教材だ。1. 自主防災意識の大切さ、2. 災害伝承の必要性、3. 誉れ高いノーブレス･オブリージ（佐々淳行、2001）
- たとえば「稲むらの火」のような物語を通して、災害を伝承することの大切さとともに、いざというときの迅速な判断や行動が、いかに災害の軽減に役立つのかなど、これからの時代を背負っていく子どもたちに対して、防災教育を進めておくことの有効性を感じるのである。（伊藤和明、2005）

防災面での功績（2）

- 100年スケールで襲ってくる自然災害は、面識の人々の記憶の中に受け継がれるのでは不十分です。「稲むらの火」のような伝説となって、後世に幅広く知れ渡ることが必要です。　／　津波が人々を襲うのは、数十年から100年単位という時間の長さです。この時間は日々の生活の時間間隔からは、なかなかイメージのしにくいものです。浜口がもっとも優れていた点は、長期防災計画を「長尺の目」で立てたことにあります。（鎌田浩毅、2013）
- 儀兵衛は、設計や土木工事の専門家ではない。そんな儀兵衛が、百年後にも役立つ堤防を造ったことは、まさに、おどろくべきことであり、偉大な功績である。　／　物質的な援助だけでなく、防災事業と住民の生活援助を合わせて行ったことである。また、住民どうしが、たがいに助け合いながら、自分たちが住む所を守るのだという意識をもつようにうながしたことも大きい。他のものにたよるのではない、自助の意識と共助の意識である。（河田惠昭、2015）

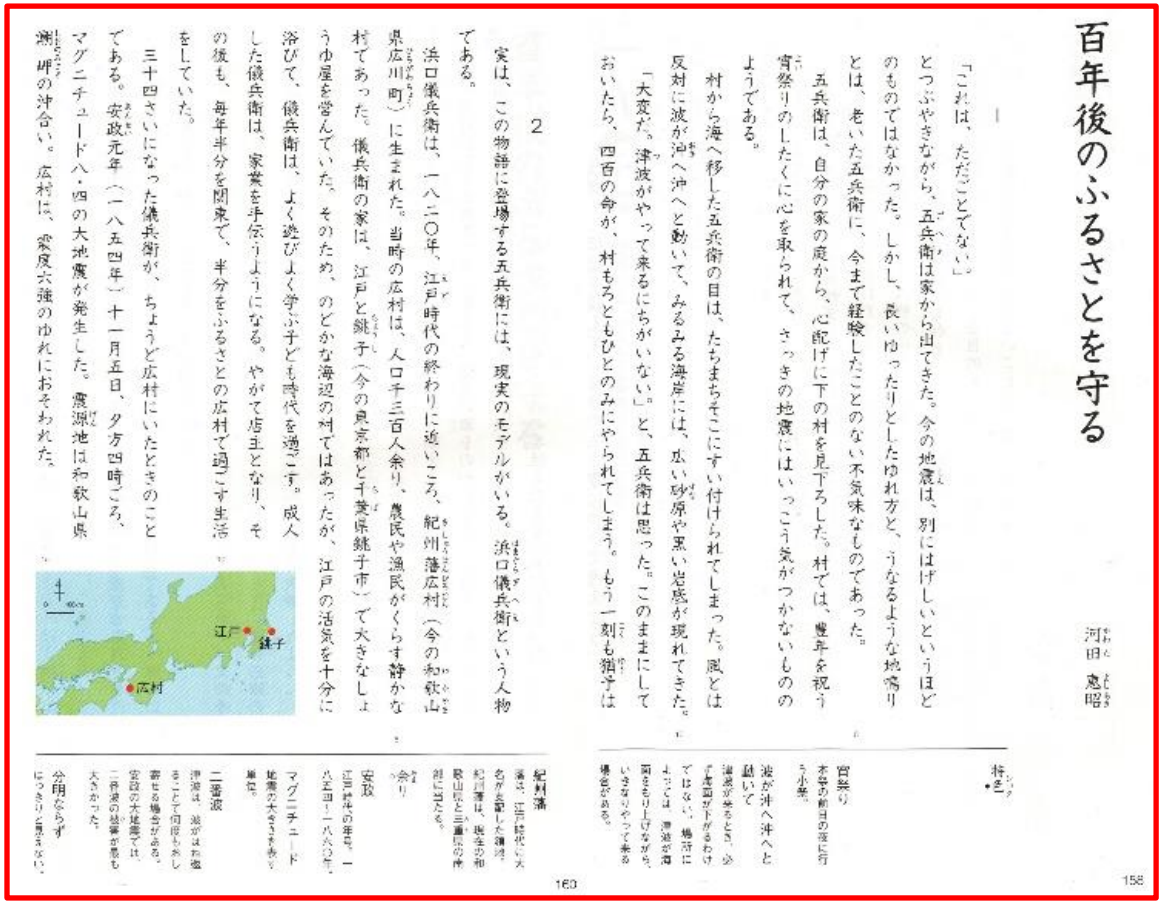
防災面での功績（3）

- 今日、防災以外の社会的諸問題（たとえば、子どもの教育や、差別や人権問題、高齢化や過疎・過密の問題、平和と戦争、あるいは、地球規模の環境問題など）にもエキスパートとして精通し、それらと防災を統合した総合的な観点から地域防災力について考え実践している人物がどれだけいるだろうか。・・・濱口梧陵の総合性にあらためて学ぶ必要があると思われる。（矢守克也・他、2011）
- 危機管理は、・・・今日明日の食事や金銭ほどにはありがたみが感じられなく、受け入れられることは少ない。食事や金銭は毎日のことであり、危機は50年や100年に1度のことであるからである。・・・濱口梧陵（儀兵衛）の作った堤防は、今も健在である。築造して約100年後に起きた1946年の南海大地震の津波の際にも、広川町は全く津波の被害を受けなかった。100年後の子孫のためにりんごの木を植える視野こそが望まれる。（加藤茂孝、2013）

まとめ：防災面での功績

- 「稲むらの火」のような物語を通して災害の体験・教訓を伝承することの有用性→【体験・教訓の伝承】
- 津波襲来時おける迅速な判断・行動の必要性→【迅速な判断・行動】
- 広村堤防の建設作業を通じて、住民同士が互いに助け合いながら自分たちの住む地域を守るという意識の醸成→【自助・共助の意識】
- 堤防建設において緊急の復興事業（村民の雇用）と長期的な防災事業（津波対策）とを組み合わせて実施→【長期的・総合的な視点】

教科書の中の「濱口梧陵」



百年後のふるさとを守る

河田 恵昭

1

「これは、ただごとでない」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出てきた。今の地震は、別にはげしいというほどのものではなかった。しかし、長いゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことのない不気味なものであった。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下ろした。村では、豊年を祝う宵祭りのしたくに心を取られて、さっきの地震にはいっこう気がつかないもののようである。

村から海へ移した五兵衛の目は、たちまちそこにすい付けられてしまった。風とは反対に波が沖へ沖へと動いて、みるみる海岸には、広い砂原や黒い岩盤が現れてきた。

「大変だ。津波がやって来るにちがいない」と、五兵衛は思った。このままにしておいたら、四百の命が、村もろともひとのみにやられてしまう。もう一刻も猶予は

宵祭り
本祭の前日の夜に行う小祭。

波が沖へ沖へと動いて
津波が来るとき、必ずしも海面が下がるわけではない。場所によっては、津波が海面をもり上げながら、いきなりやって来る場合がある。

特色

160

2

実は、この物語に登場する五兵衛には、現実のモデルがいる。浜口儀兵衛という人物である。

浜口儀兵衛は、一八二〇年、江戸時代の終わりに近いころ、紀州藩広村（今の和歌山県広川町）に生まれた。当時の広村は、人口千三百人余り、農民や漁民がくらす静かな村であった。儀兵衛の家は、江戸と銚子（今の千葉県銚子市）で大きなしょうゆ屋を営んでいた。そのため、のどかな海辺の村ではあったが、江戸の活気を十分に浴びて、儀兵衛は、よく遊びよく学ぶ子ども時代を過ごす。成人した儀兵衛は、家業を手伝うようになる。やがて店主となり、その後も、毎年半分を関東で、半分をふるさとの広村で過ごす生活をしていた。

三十四さいになった儀兵衛が、ちょうど広村にいたときのことである。安政元年（一八五四年）十一月五日、夕方四時ごろ、マグニチュード八・四の大地震が発生した。震源地は和歌山県潮岬の沖合い。広村は、震度六強のゆれにおそわれた。

江戸
銚子
広村

紀州藩
藩は、江戸時代に大名が支配した領地。紀州藩は、現在の和歌山県と三重県の南部に当たる。

安政
江戸時代の年号。一八五四～一八六〇年。

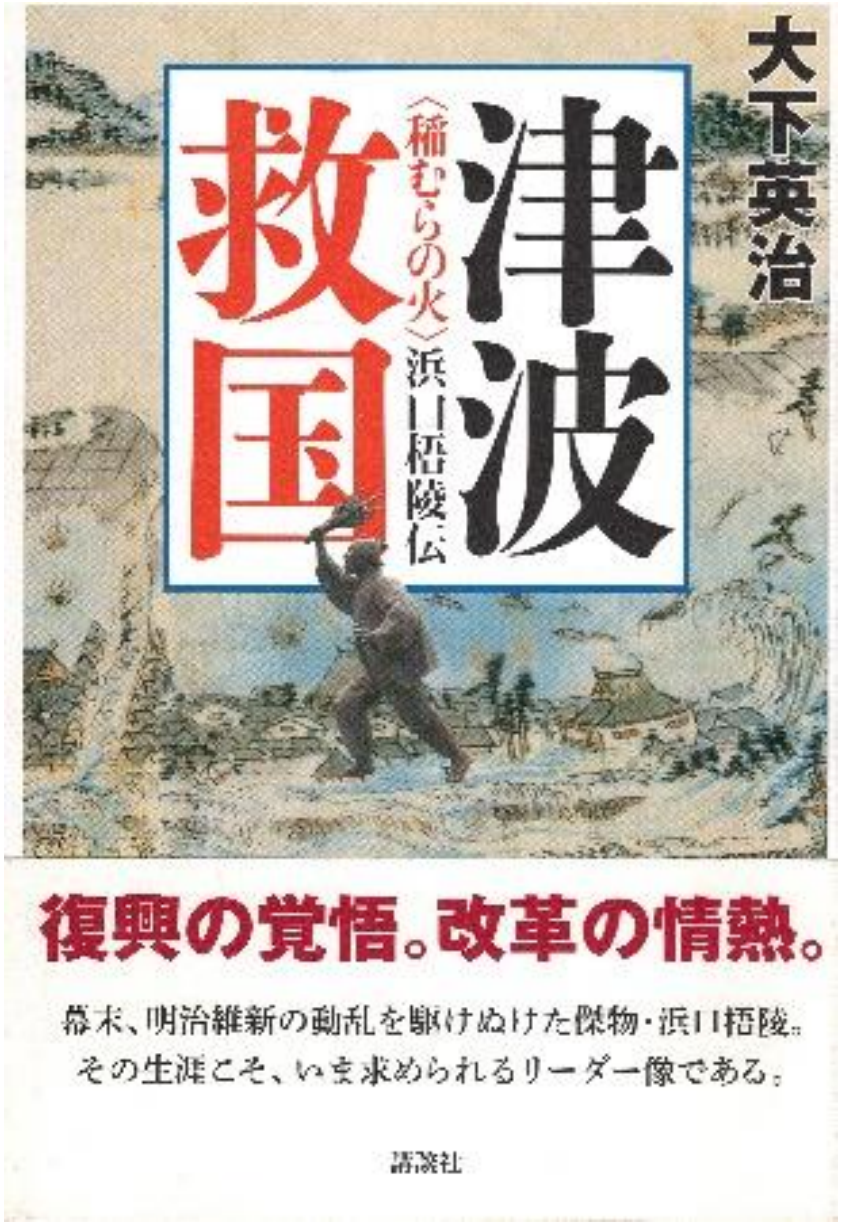
マグニチュード
地震の大きさを表す単位。

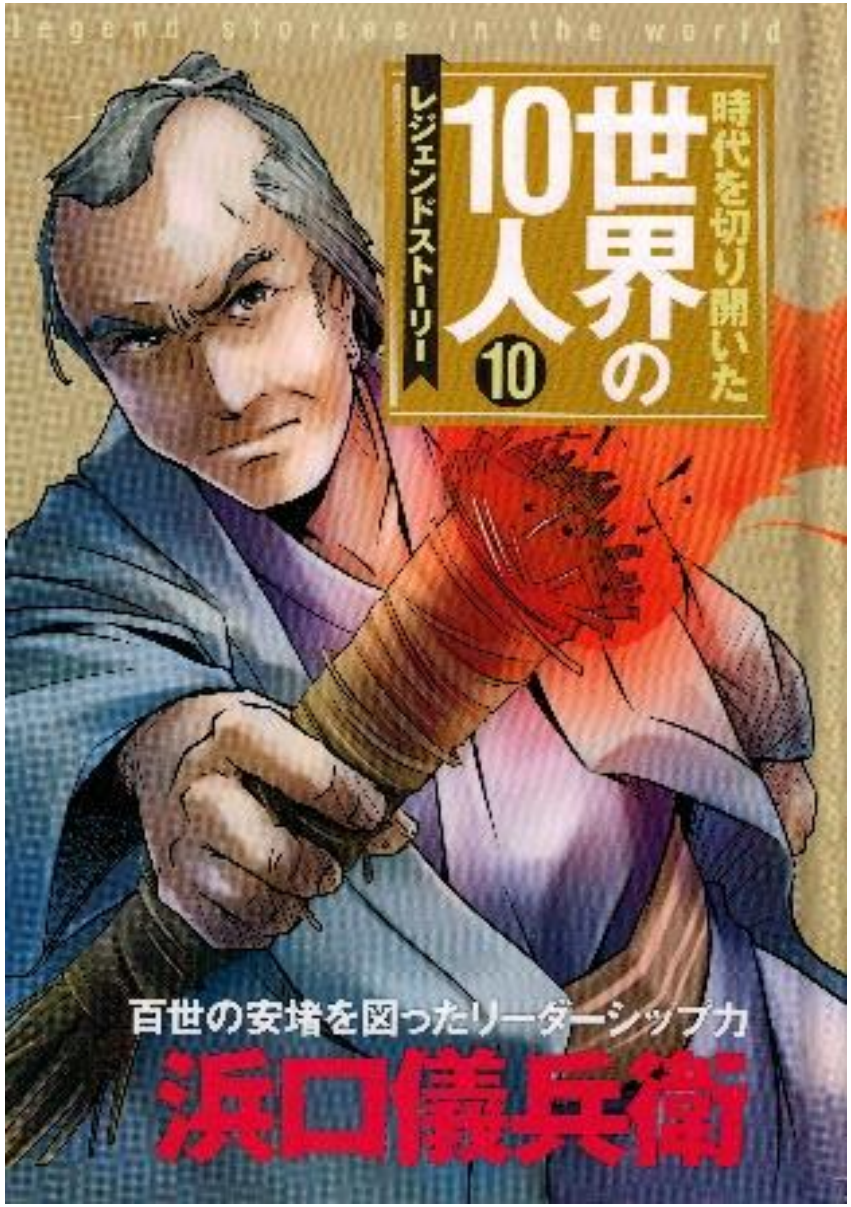
二番波
津波は、波がはれ幾重ことで何度もおし寄せる場合がある。安政の大地震では、二番波の被害が最も大きかった。

分間ならず
にっきりと区切れない。

158

教科	学年	資料名	出版社
社会	小学校3･4年	地いきのはってんにつくした人々	日本文教出版
国語	小学校5年	百年後のふるさとを守る	光村図書
社会	小学校5年	村人を津波から救った濱口梧陵	東京書籍
道徳	小学校5年	稲むらの火で命を救え	文溪堂
理科	小学校6年	地震を語りつぐ	啓林館
道徳	小学校6年	稲むらの火	教育出版
道徳	中学校1年	津波から村を守る－浜口梧陵	光村図書
道徳	中学校	住民百世の安堵を図る－濱口梧陵	廣済堂あかつき
道徳	中学校3年	「稲むらの火」余話	日本文教出版


大下英治
津波
〈稲むらの火〉浜口梧陵伝
救国
復興の覚悟。改革の情熱。
幕末、明治維新の動乱を駆けぬけた傑物・浜口梧陵。
その生涯こそ、いま求められるリーダー像である。
講談社


legend stories in the world
時代を切り開いた
世界の10人
10
レジェンドストーリー
百世の安堵を図ったリーダーシップ力
浜口儀兵衛

１１月５日

津波防災の日制定
（2015年）

世界津波の日制定
（2016年）

わが国の感染症　「痘痕（あばた）も靨（えくぼ）」

- わが国での**天然痘**（疱瘡、痘瘡）の流行は、江戸時代までは、数十年の間隔で大流行が発生していたが、江戸時代になると、毎年のように発生。
- 長崎で蘭方医学を学んだ三宅艮斎は、天保の改革による不況と**蘭学に対する圧迫**が激しく、江戸での開業が困難であったため、梧陵の勧めもあって1841年に銚子で開業。その後、1844年、三宅艮斎は佐倉藩医となって銚子を去ったものの、梧陵との親交は続いた。

天然痘の種痘の歴史

漢方医（守旧派）
vs
蘭方医（改革派）

- 1796年　ジェンナーの牛痘法
- 1823年　長崎：牛痘接種　失敗
- 1849年　江戸：蘭方医学禁止令（3月）
  長崎：牛痘接種　成功（6月）
  →　江戸以外で種痘が広まる
- 1858年　江戸：**お玉ヶ池種痘所（5月）**　蘭方解禁（7月）　種痘所**焼失**（11月）
- 1859年　江戸：種痘所**再建**（9月）

種痘所への資金援助（1）

- 1858年5月、天然痘の予防・治療を目的として、江戸在住の蘭方医83名（三宅艮斎を含む）が資金（計約580両）を出し合って「**お玉ヶ池種痘所**」を開設。しかし、同年11月、付近で発生した火災により種痘所は全焼。
- 三宅艮斎から種痘所再建を相談された梧陵は、300両を寄付して、1859年末に種痘所は再建。さらに、種痘所の医書・医療器具を充実させるため、400両を寄付。

種痘所への資金援助(2)

- その後、お玉ヶ池種痘所は、「西洋医学所」「医学校」「東京医学校」などと改称して、現在の「東京大学医学部」に至る。

東京大学医学部の創立100周年を記念し、1958年に建立。

(撮影:2016年7月)

東京大学医学部の歩み

東京大学医学部の歩み
江戸～明治

サイトマップ

HOME > 東京大学医学部の歩み　江戸～明治 > 1858～1867

サイトの利用 | 操作ガイド | 原本の利用

1858 → 1868

58（安政5）	5月	江戸の蘭方医83名の出資により神田お玉ヶ池に**私設の種痘所**が開設される 種痘の普及と西洋医学の講習を行うことを目的とした
	7月	将軍家定の病状が重症化する　1849年より禁止されていた 蘭方医術が解禁され伊東玄朴，戸塚静海が奥医師となる
	11月	神田相生町からの出火で種痘所が類焼する 大槻俊斎　伊東玄朴　宅を臨時の種痘所とし，種痘業務を続ける
	12月	仮小屋を下谷和泉橋通りに建てる
59（安政6）	9月	下谷和泉橋通りに種痘所を再建する
60（万延元）	7月	幕府からの公式な援助を得られることになる
	10月	幕府に接収され，**官立の種痘所**となる 初代頭取に大槻俊斎

伊東玄朴
「医療正始」

大槻俊斎
「扶氏診断」

（https://www.lib.m.u-tokyo.ac.jp/digital/ayumi.html）

天然痘の根絶

- 1958年世界天然痘根絶計画が世界保健機構（WHO）総会で可決。当時世界33カ国に天然痘は常在し、発生数は約2,000 万人、死亡数は400万人と推計。
- その後、1977年ソマリアにおける患者発生を最後に地球上から天然痘は消え去った。
- その後2年間 の監視期間を経て、**1980年**5月、WHO は天然痘の世界根絶を宣言。

コレラ大流行

- わが国でのコレラ（虎列刺、虎狼痢など）の流行は、1822年が初めてで、1858年に再び流行。
- 1858年5月に長崎に入港した米国軍艦からコレラが持ち込まれ、その流行は、長崎から大阪、京都を経て江戸にまで広がった。

大阪では1日に800人の死者が出て、江戸だけで3万人の死者（10万人との説もある）。

No.	碑銘	疫病の種類	疫病の流行年	石碑の建立年	石碑の所在地
1	大泊の安政コレラ名号塔	コレラ	安政5年	安政6年	埼玉県越谷市
2	名号塔	コレラ	安政5年		神奈川県山北町
3	題目塔	コレラ	安政5年		神奈川県小田原市
4	富士浅間大菩薩供養塔	コレラ	安政5年		神奈川県南足柄市
5	夢告地蔵尊	コレラ	安政5年		静岡県浜松市
6	東雲寺名号碑	コレラ	安政6年	安政6年	宮城県石巻市
7	コロリ不動さま	コレラ	安政6年		富山県砺波市
8	六体地蔵	コレラ	文久年間		富山県砺波市
9	玄昌碑	コレラ	明治10年	明治10年	千葉県鴨川市
10	烈医沼野玄昌先生弔魂碑	コレラ	明治10年	昭和53年	千葉県鴨川市
11	故長崎県令北島君之碑	コレラ	明治10年		長崎県長崎市
12	内藤智道君慰霊碑	コレラ	明治10年		鹿児島県さつま町
13	左右田豊巡査の碑	コレラ	明治12年		千葉県館山市
14	左右田豊の碑	コレラ	明治12年		千葉県大多喜町
15	殉職警官の合同慰霊碑			昭和63年	千葉県館山市
16	虎列刺菩薩碑	コレラ	明治12年		山形県米沢市
17	虎列刺菩薩、虎列刺大明神	コレラ	明治12年	明治12年	山形県米沢市
18	地蔵尊	コレラ	明治12年	明治13年	山形県酒田市
19	神田君碑	コレラ	明治12年	大正2年	千葉県館山市
20	奥川求馬先生之碑	コレラ	明治12年	明治13年	静岡県静岡市
21	岡村景樓記念碑	コレラ	明治12年		高知県高知市
22	コレラ防疫碑	コレラ	明治12年	明治13年	奈良県香芝市
23	霊應碑	コレラ	明治12年		広島県福山市
24	コレラ地蔵	コレラ	明治12年	明治15年	広島県福山市
25	供養塔	コレラ	明治12年	明治12年	新潟県相川町
26	虎列刺病死三百七十三人供養塔	コレラ	明治12年	明治16年	新潟県相川町
27	供養塔(門徒墓)	コレラ	明治12年	明治14年	新潟県相川町
28	和吉の墓	コレラ	明治12年		愛媛県川之江市
29	猿田彦大神	コレラ	明治12年	明治12年	青森県青森市
30	猿田彦大神百年記念碑	コレラ	明治12年	昭和53年	青森県青森市
31	薬師如来	コレラ	明治12年	明治20年	富山県砺波市
32	坂下のコレラ堂	コレラ	明治12年	明治19年	富山県井波町
33	三宝荒神	赤痢	明治12年		富山県富山市
34	コレラ供養碑	コレラ		明治26年	宮城県若柳町
35	飯田君墓碑銘	コレラ	明治15年		千葉県銚子市
36	叢塚	コレラ	明治15年	明治15年	宮城県仙台市青葉区
37	焼場供養塔	コレラ	明治15年		宮城県仙台市青葉区
38	コレラ地蔵	コレラ	明治15年		宮城県小野田町
39	紀念碑	コレラ	明治15年	明治16年	宮城県石巻市
40	紀念碑	コレラ	明治15年		宮城県石巻市
41	コレラ地蔵	コレラ	明治15年		香川県丸亀市
42	桜田儀兵衛氏之碑	コレラ	明治19年		京都府京都市
43	江崎邦助巡査夫妻殉職之地碑	コレラ	明治19年		愛知県田原市
44	悪疫横死諸群霊墓	コレラ	明治19年	明治26年	神奈川県横浜市西区

No.	碑銘	疫病の種類	疫病の流行年	石碑の建立年	石碑の所在地
45	斉藤實道巡査の墓碑	コレラ	明治19年		石川県志賀町
46	慰霊碑	コレラ	明治19年		石川県能都町
47	桧垣清太郎の碑	コレラ	明治19年		愛媛県川之江市
48	菊池三司巡査の殉難碑	コレラ	明治19年	明治20年	青森県むつ市
49	三界萬霊塔	コレラ	明治19年	明治19年	青森県八戸市
50	コレラ死亡者供養之碑	コレラ	明治19年		青森県八戸市
51	三界萬霊塔	コレラ	明治19年	明治19年	青森県八戸市
52	疫病死者碑	コレラ	明治19年	明治31年	青森県八戸市
53	虎列拉病没者供養塔	コレラ	明治19年	大正元年	青森県八戸市
54	傳染病死亡者之墓				神奈川県横浜市
55	星野秀太郎記念碑	腸チフス	明治21年		高知県高知市
56	銚子署殉難警察官慰霊碑	腸チフス	明治21年		千葉県銚子市
57	殉職警察官の慰霊碑	コレラ	明治23年		千葉県八日市場町
58	殉難警察官の碑	天然痘	明治25年		千葉県佐倉市
59	臨時陸軍検疫部職員死者追悼ノ碑			明治28年	広島県広島市南区
60	名号碑	コレラ？			宮城県仙台市
61	故佐賀県巡査増田氏碑	コレラ	明治28年		佐賀県唐津市
62	警神増田敬太郎顕彰碑	コレラ		昭和37年	熊本県泗水町
63	奈賀房松頌徳碑	赤痢	明治32年		和歌山県美浜町
64	弔魂碑	赤痢	明治32年	明治32年	岩手県大船渡市
65	鼠塚	ペスト	明治33･34年	明治35年	東京都渋谷区
66	殉職警察官の慰霊碑	腸チフス	明治37年		千葉県八日市場町
67	佐藤守一君碑	赤痢		明治38年	岩手県一関市
68	(伝染病で死亡した妻の供養碑)	コレラ	大正5年	大正6年	富山県利賀村
69	疫病退散塔			大正7年	岩手県雫石町
70	大正八九年流行感冒病死者群霊	スペインかぜ	大正8･9年	大正11年	大阪府大阪市天王寺区
71	大正八九年流行感冒病死者群霊	スペインかぜ	大正8･9年		兵庫県宝塚市
72	(スペイン風邪の状況を記した石碑)	スペインかぜ	大正8年		福井県大野市
73	軍艦矢矧殉職者之碑	スペインかぜ	大正7･8年	大正9年？	広島県呉市
74	ドイツ兵の名が刻まれた碑	スペインかぜ	大正8年		千葉県船橋市
75	板東俘虜収容所ドイツ兵捕虜慰霊碑	スペインかぜ	大正8年？	大正8年	徳島県鳴門市
76	罹災児童供養碑	チフス		昭和10年	岩手県一関市
77	疫病防除記念碑	チフス	昭和12年		千葉県茂原市
78	八重山戦争マラリア犠牲者慰霊之碑	マラリア	昭和20年	平成9年	沖縄県石垣市
79	忘勿石之碑	マラリア	昭和20年	平成4年	沖縄県竹富町
80	学童慰霊碑	マラリア	昭和20年	昭和59年	沖縄県竹富町
81	浦賀港引揚記念の碑	コレラ	昭和21年	平成18年	神奈川県横須賀市
82	天然痘神			昭和21年	岩手県葛巻町
83	地方病流行終息の碑	日本住血吸虫症		平成14年	山梨県昭和町
84	守田福松の碑				

藤本一雄：日本各地の石碑に刻まれた疫病流行の記憶、地域安全学会梗概集、No.47、2020.

A) 施設内･地域内で集団発生する犠牲者

- **地域内**で集団発生する犠牲者
  - 「虎列刺菩薩碑」(山形県米沢市，明治12年コレラ，「部落**人口50数人の内19人が死んだ**」)
  - 「坂下のコレラ堂」(富山県井波町，明治12年コレラ，「井波町では，八月わずか1ヶ月間で，**45人も死亡した**」)
  - 「叢塚」(宮城県仙台市，「明治15年に仙台で流行したコレラで亡くなった**276名の屍体**を焼いた」)
  - 「悪疫横死者諸群霊墓」(神奈川県横浜市，「明治19年コレラなどの伝染病で死亡した無縁者の**残骨300余り**」) など

⇒ 集落･地域内で数十～数百人が死亡

藤本一雄：日本各地の石碑に刻まれた疫病流行の記憶、地域安全学会梗概集、No.47、2020.

B) 医療･検疫･防疫従事者の犠牲

- 「内藤智道君慰霊碑」(鹿児島県さつま町，明治10年コレラ，**享年31**)
- 「左右田豊巡査の碑」(千葉県館山市，明治12年コレラ，**享年19**)
- 「**飯田君墓碑銘**」(千葉県銚子市，明治15年コレラ，**享年27**)
- 「江崎邦助巡査夫妻殉職之地碑」(愛知県田原市，明治19年コレラ，**享年25･19**)
- 「故佐賀県巡査増田氏碑」(佐賀県唐津市，明治28年コレラ，**享年25**) など

藤本一雄：日本各地の石碑に刻まれた疫病流行の記憶、地域安全学会梗概集、No.47、2020.

c) 不安・混乱がもたらす犠牲者

- 明治10年9月に千葉県の鴨川町でコレラ患者が出たため，小湊の**医師　沼野玄昌**が死者の火葬や井戸の消毒などの防疫活動を行っていたが，11月にも鴨川でコレラ患者が発生したため隔離のために出向いたところ，玄昌が井戸に毒を入れ患者の生き胆を抜くという噂が流れ，それを妄信した住民が押し寄せ，玄昌を**襲撃・殺害するという事件**が起こった。

藤本一雄：日本各地の石碑に刻まれた疫病流行の記憶、地域安全学会梗概集、No.47、2020.

銚子のコレラ防疫（1）

- このとき江戸にいた梧陵は、銚子の店の支配人と**関寛斎**に手紙を送った。関寛斎は、1856年2月から銚子で開業していた蘭方医で、梧陵に認められ、三宅艮斎以上に親身の援助を受けていた。
- その手紙の内容は、江戸で大流行しているコレラは、近いうち銚子にも広がると考えられるので、コレラの予防法・治療法を学ぶため、関寛斎に江戸に来るようにというものであった。

銚子のコレラ防疫（2）

- 江戸に来た関寛斎は、梧陵から紹介された蘭方医の林洞海と三宅艮斎から治療法・予防法を学び、薬品・書籍を購入して銚子に戻った。
- そのとき**銚子**でもコレラが流行りつつあったが、関寛斎の防疫治療により被害を最小限に食い止めることができた。

防疫面での功績（1）

- 銚子にコレラの蔓延するを恐れ、開業医関寛斎をしてこれが防疫にあたらせる。神田お玉ヶ池種痘所再建資金及び医学研究費用として西洋医学所に多額の寄付をする。国づくりは人づくりにあるとし、医生・医師を含めた人材育成。病院の建設、あるいは薬学書の出版等に対する資金援助及び協力。（川村純一、2008）
- 若し寛齋が梧陵の命に依りて江戸に出で、其の治療法を學ぶ事なかりせば、舊式の醫術と藥品の不備とに依りて、銚子は如何の慘害を被れるか知るべからず。／梧陵が醫學の進歩せざる明治以前にありて、斯くの如き防疫的施設をなせるは、稀に見るの卓見と云ふべく、殊に一切の費用を支出して、一地方の防疫事務を自ら負擔せるが如きは、民を思ふの情領主も及ばざる所といふべし。（杉村広太郎、1920）

防疫面での功績（2）

- 多くの功績は、『浜口梧陵伝』に説述されているからソレに譲り、ここには銚子に関する事績について述べる。梧陵の銚子に於ける特筆すべき一ツは、コレラ防疫に対する処置であって、･･･／これは我が国に於ける種痘活動の先駆をなすものであるが、江戸時代の乳幼児死亡の病因大半を占めていた疱瘡（天然痘）は、これより漸減遂に根絶するに至った次第であって、我が国医学史上最も大きな貢献と云わねばならぬ。（篠崎四郎編、1981）
- 梧陵が寛斎を援助したのは決して寛斎個人に対する私情がすべてではない。寛斎という人間を通して社会へ貢献しようとするより高度の目的があったのである。（銚子市医師会、1964）

防疫面での功績（3）

- 山崎佐氏は「お玉ヶ池種痘所」なる一文において、浜口梧陵の貢献に触れ、次のように述べているのである。「如何に優れた研究者があり、熱心な篤学者があっても、その自力のみでは到底大事業は完成するものではない。･･･市井の町民の内にも之と同様に、時勢を達観し、私財を擲って我邦の学問の進歩完達を援助したものは昔でも決して少くない。殊に福井武生の打刃物商松井六右衛門耕雪、京都の鳩居堂尚恭、及びこの浜口梧陵は、その最も顕著なものである。」私塾を開設し、或いは人材養成の為に学資を給する等のことは、幕末においては広く各地の豪農商・名望家層に見られるところであり、地方文化の開発に少なからざる寄与をなしているのであるが、特に浜口の如き、特に好箇の事例として挙ぐるに足るものがあろうと考えられる。（伝田 功、1962）

防疫面での功績（4）

- もし寄付者の名前を冠するアメリカの場合なら、浜口梧陵種痘所というふうに称せられたにちがいない。後年、小泉八雲が梧陵のことを生きた神といったが、この人物の西洋医学勃興時代の功績は大きい。（司馬遼太郎、1979）
- このお玉ヶ池種痘所が、明治10年に東大医学部へと発展していったので、彼はまさに日本医学を救済したといっても過言ではなかろう。（木村専太郎、2010）
- 江戸の神田お玉が池の種痘所が建築（1858年5月）後わずか7ヶ月で神田大火で焼けた時には、銚子のヤマサ醤油の濱口梧陵は500数十両を寄付して種痘所を再建している（1860年）。・・・時代劇では、強欲に書かれて悪役扱いされることがある江戸時代の豪商達の中には、実際は先駆的で社会に大きな貢献をした人達が多かったのである。（加藤茂孝、2013）

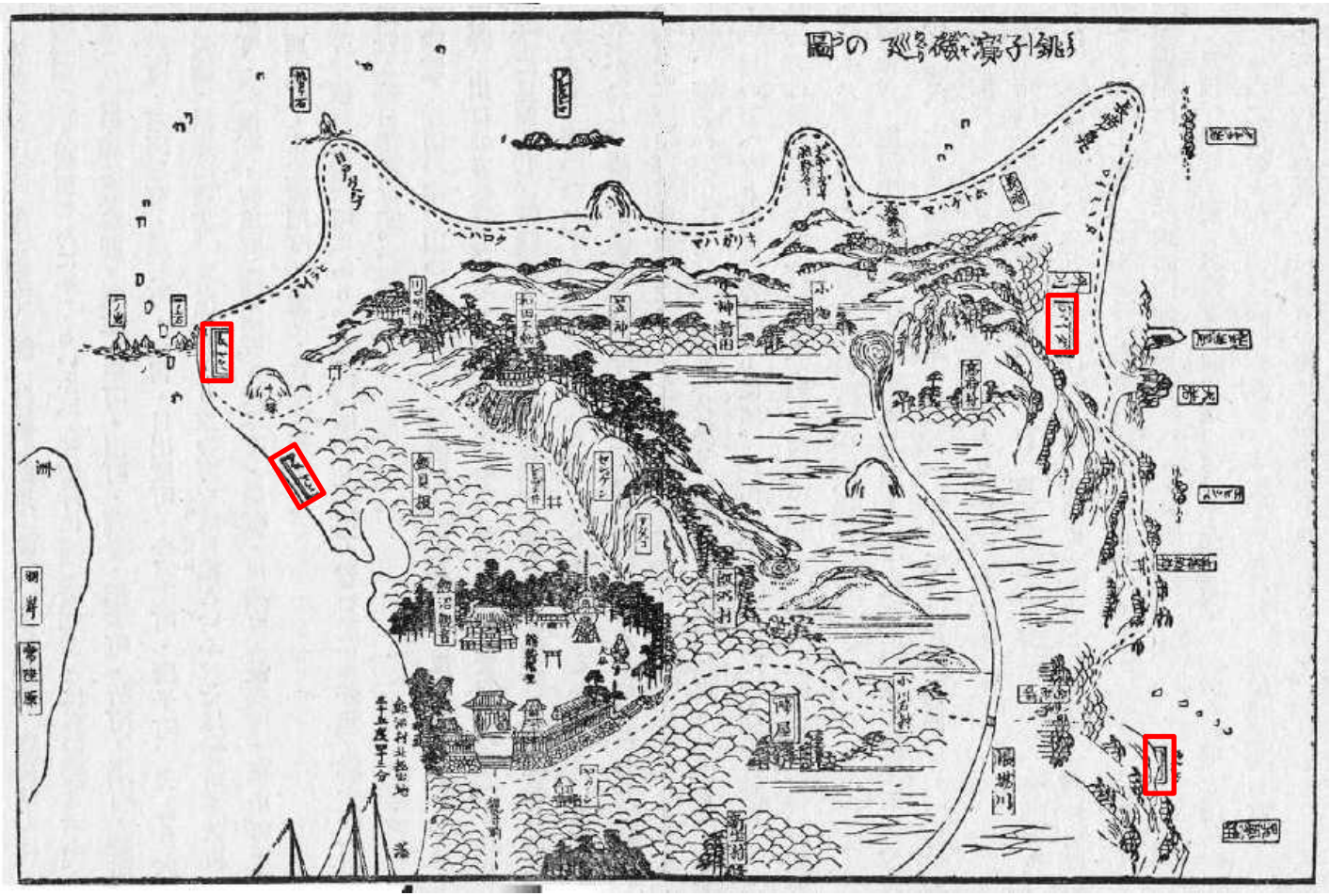
まとめ：**防疫面**での功績

- 江戸でのコレラ流行から銚子への蔓延を予見して、関寛斎を介して、銚子でのコレラ防疫活動に取り組んだこと→【先見性・実行力】
- 焼失した種痘所の再建等への資金提供、江戸・銚子での医生・医師の人材育成を通じての医学分野に対する多大な貢献→【地域・社会への貢献】

異国船の出没

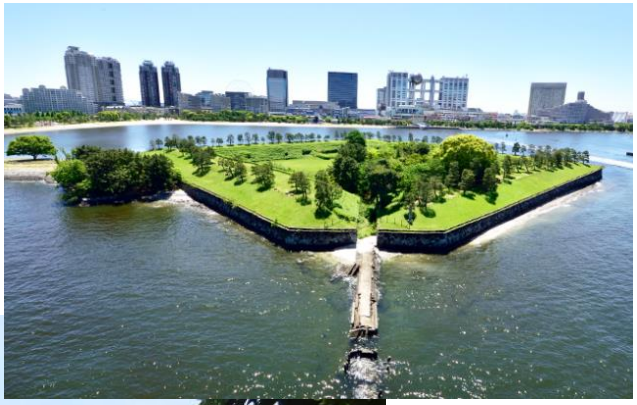
- 江戸時代のわが国は、鎖国政策によっておおむね平和な時代を過ごしていた。
- 18世紀末からわが国の近海に異国船が頻繁に現れるようになり、欧米列強による植民地化に対する危機意識が次第に高まっていった。
- 1824年の**大津浜事件（5月）**と宝島事件（8月）をきっかけとして、江戸幕府は1825年に**異国船打払令**を出した。また、諸藩でも**大筒台場**を築造して海防の強化に努めていた。

銚子の台場



赤松宗旦（1855年）『利根川図志』

東京の台場公園



（撮影:2016年7月）

自衛組織づくり

- 濱口梧陵は、1851年8月、異国船から広村を守るため、村内の成年男子を集めて「**広村崇義団**」を結成。この当時の梧陵は、やや攘夷的な思想であった。
- その後、紀州藩の藩政改革に参画するようになり、1868年に**農兵制**の具体案を藩主に提案。その後、紀州藩では1869年に**徴兵制度**を導入し、これが明治政府による全国的な徴兵制度（1873年）へとつながっていく。

攘夷論から開国論へ

- 広村崇義団の結成後、佐久間象山、勝海舟らとの交友を通じて、攘夷論から**開国論**を唱えるように変わった。
- 開国するためには教育による人材育成を先決すべきとの考えから、1852年11月、村内の青年たちへの**教育事業**として「**広村稽古場**」を開所。

海外渡航

- 1853年に黒船が来航したときには、鎖国政策の中、欧米の知識・技術を習得するため、海外渡航を熱望したものの断念した（吉田松陰も密航を試みるが、失敗・投獄）。して断念。
- 1859年、勝海舟から**咸臨丸**への同乗を誘われるが、家業の経営を優先して断念。

美加保丸の遭難碑（銚子市黒生町）

教育事業

- 1866年、広村稽古場を**耐久社**へと改称し、現在の和歌山県立耐久高等学校、広川町立耐久中学校に至る。
- 1869年、紀州藩の大広間席学習館知事に任命されるとともに、「共立学舎」の設立に奔走した（英語教育のため福沢諭吉の招聘を試みる）。

防衛面での功績（1）

- 梧陵は、･･･藩の機構改正、財政再建、殖産興業の振興、徴兵制による近代的な陸海軍の創設など、藩制改革に大いに力を尽くした。／梧陵は、藩の執政・津田出をよく助けてこれらの行政を行った。特に、紀州の徴兵制度の実施は、明治6年の政府の徴兵制度実施よりも3年も早く行われ、ここにも、きびしい時代にもかかわらず、紀州人特有の進取の気性を見てとることができる。（田中重弥、1984）
- 高杉晋作が、武士だけでなく庶民をも組みこんだ混成部隊「奇兵隊」を結成したのは、文久3年（1863）である。その十年も前から、梧陵は、農民を入れた皆兵式の軍隊を考え実行に移していたのである。（大下英治、2013）

防衛面での功績（2）

- 松陰の開塾が安政３年にして、梧陵の稽古場創設に後るゝこと5年なるを知らば、誰か彼の識見の凡ならざるを爭はんや。／梧陵さんも國防と云ふ事を考へて浦組などを造ってゐたのですが、根本の精神は餘程（菊池）海莊とは違ふ様でした。即ち大砲を作る事も必要だらうが、それよりも人心を導き、それを一致させる方が肝要だ。さうするには大砲よりは先づ學校を起し、文武の道を勵まして、人材を養成しなければならぬと考へてゐた様です。（杉村広太郎、1920）
- この浜口梧陵も、天誅組の残党狩りの命令が出たときに、日本人同士の戦争はごめんをこうむると、きっぱり拒否していた。ここにみられる国民意識が、のちに、浜口の国民皆兵的な農兵制度論となって結実するのである。（奈良本辰也、1966）

防衛面での功績（3）

- 武士層の海防論議がイデオロギー的には名分論と華夷内外の弁とに固執し、戦術的には和兵と洋兵の優劣に泥んで実質的な進歩が見られなかったのに比べ、浜口（梧陵）の立場はごく素直に民衆の心に訴えることによって、少なくとも己の郷土を自力で防衛しようとする立場を確立している。（橋川文三、2015）
- 梧陵については、みずから早くから西洋砲術・大砲鋳造についての関心を抱き、その実践に努めただけでなく、未だ藩がとくに留意しない以前においてその方面の人材育成を図った点を注目しなければならない。（梅渓昇、1984）

防衛面での功績（4）

- 嘉永年間彼はさらに豪商渋田利右衛門の紹介によって勝海舟と相識り、爾後その開明的な思想に大きな影響を受け、開国を契機として菊池海壮等と思想的傾向を全く異にするに至ったが、開国前彼がすでに明白な国家意識を有していた事実は、特に嘉永四年紀州広村における崇義団の結成等に明白に示されるのである。 ／ 後述のように彼は、庶民階級に対する啓蒙活動、即ち教育事業の重要であることを強く意識し、それによって国民的統一を計ろうとしているのであるが、かような経緯とも関連して、彼の思想と行動とは、単に他民族・他国民に対するのみではなくて、そのためには封建的な割拠主義を排し、国民的統合をいちはやく達成することを喫緊の要事としているところに、当時のナショナリズム運動として、より先進的な立場が打ち出されていることに留意しなければならない。（伝田 功、1962）

まとめ：防衛面での功績

- 士農工商の明確な階級社会の当時において、時代を先取りした農民による自衛組織「広村崇義団」の結成→【先見性・実行力】
- 「国民」としての意識が乏しい幕藩体制の当時において、崇義団を結成した動機が“自分たちの郷土（国）は自分たちで守る”“日本人同士の争いには参加しない”との意識に基づいている→【郷土愛・愛国心】
- 自分たちの郷土（国）を守るため、また、その発展のためには、まず、武力よりも人材の育成が先決であるとの考えのもと、教育事業に尽力したこと→【教育による人材育成】

その後の功績など

- 1871年：大久保利通の要請で初代**駅逓頭**（のちの郵政大臣に相当）に就任。
- 1880年：和歌山県の初代**県会議長**に就任。
- 1885年：かつてからの夢だった世界旅行に行くも、アメリカ・ニューヨークで客死。

濱口梧陵碑(広川町)
建立:1893年

濱口梧陵紀德碑(銚子市)
建立:1897年

濱口梧陵の功績から学べること

1. 低頻度・巨大損失事象の体験・教訓の伝承
   - 巨大災害、感染症大流行（パンデミック）、戦争（テロ）
2. リスクマネジメントとクライシスマネジメント
   - 【長期的・総合的な視点】
   - 【迅速な判断・行動】、【先見性・実行力】
3. 自助・共助の重要性
   - 【郷土愛・愛国心】を動機とする内発的な自助
   - 平常時からの共助の体制づくり

1.低頻度・巨大損失事象の体験・教訓の伝承

- 「『防』という字が頭につく国家危機管理行政には4つの範疇がある。『防衛』『防災』『防犯』『防疫』だが、・・・」（佐々淳行、2010）

防災（自然災害） → 安全
防疫（感染症） → 健康
防衛（戦争・テロ） → 平和

嘉永･安政年間（1848～60年）

- 1853･54年　黒船来航
- 1854年　日米和親条約
- 1854年　安政東海地震（2～3千人）
- 1854年　安政南海地震（数千人）
- 1855年　安政江戸地震（6千～1万人）
- 1856年　安政3年の大風災（10万人?）
- 1858年　コレラ大流行（江戸2万～10万人?）

大正年間（1912～1926年）

- 1914～1918年　第1次世界大戦（全世界で1,600万人）
- 1917年　大正6年の大海嘯（1,300人以上）
- 1918年　米騒動
- 1918～1920年　スペイン風邪（39～45万人）
- 1923年　関東大震災（10.5万人）

巨大自然災害

- 1703年　元禄地震、1707年　宝永地震
- 1854年　安政東海地震、安政南海地震
- 1855年　安政江戸地震
- 1923年　関東地震
- 1944年　昭和東南海地震
- 1946年　昭和南海地震
- 2021年
- 将来　（**南海トラフ地震**）、（**首都直下地震**）

約150年

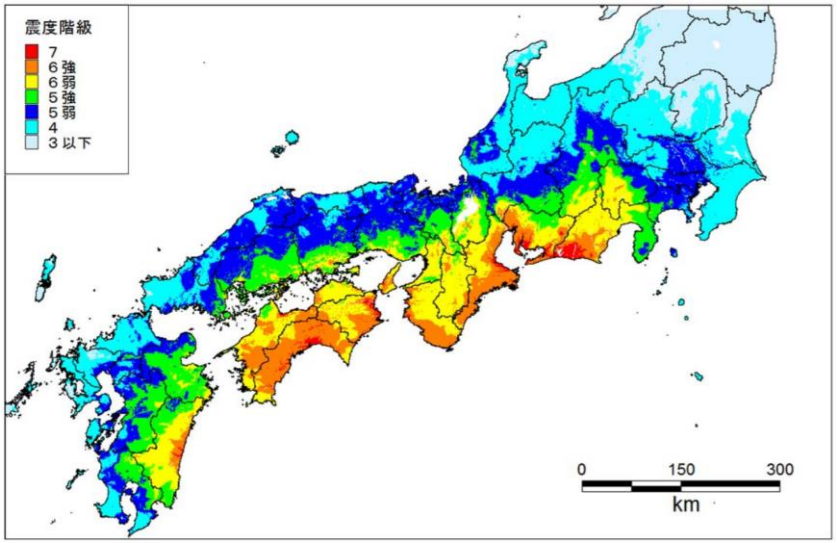
約90年

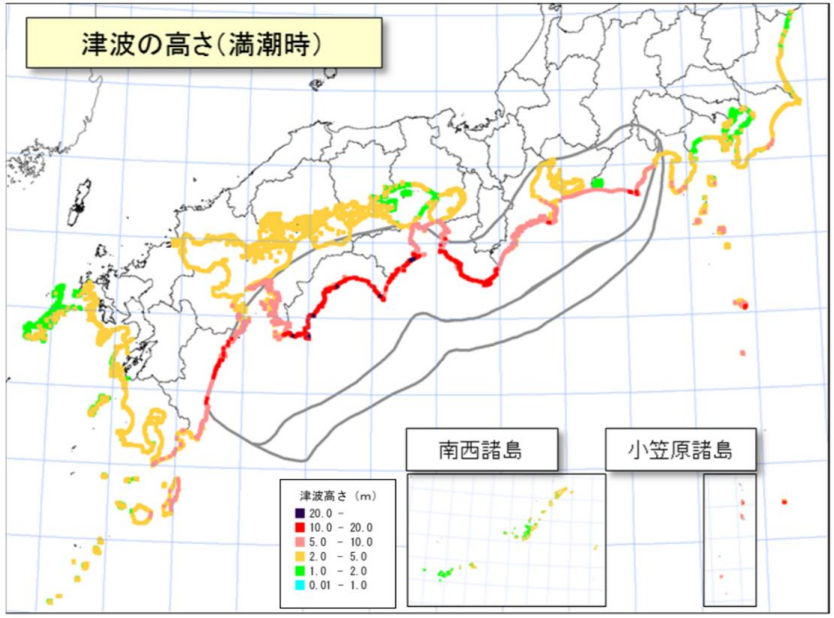
約75年

南海トラフ地震

- 死者・行方不明者数：
  最大約23万1000人
- 全壊・焼失建物数：
  最大約209万4000棟

（時事通信 2019年5月31日）

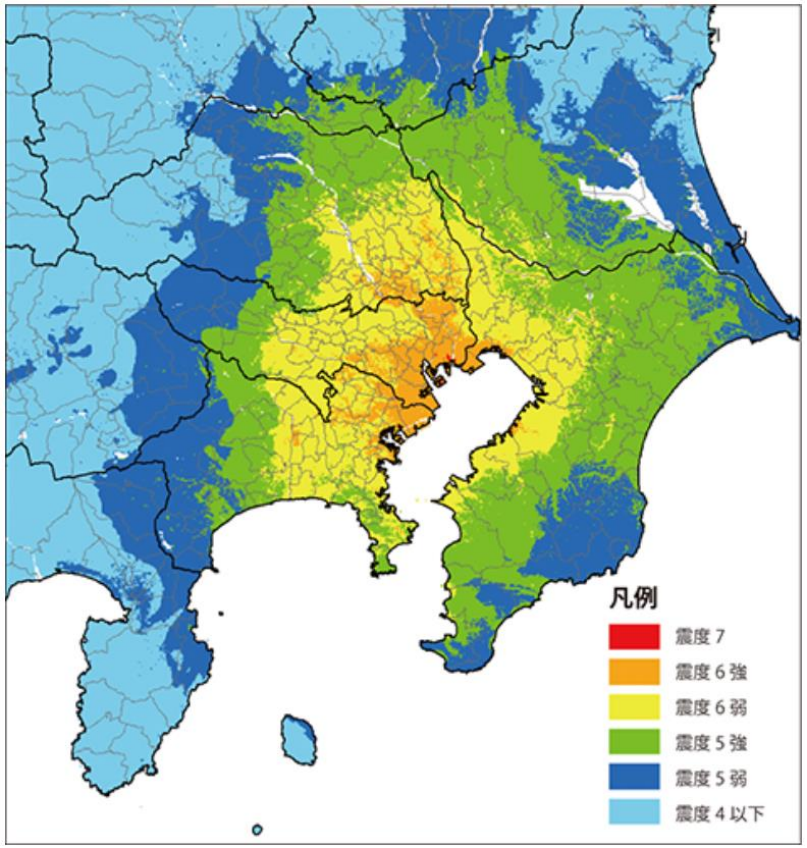




<u>和歌山県広川町</u>
最大震度：７
最大津波高：１０m
津波（1m）到達最短時間：35分

首都直下地震

- 焼失：最大約412,000棟、建物倒壊等と合わせ最大約610,000棟
- 死者：最大約16,000人、建物倒壊等と合わせ最大約 23,000人
- 建物等の直接被害：約47兆円＋生産・サービス低下の被害：約48兆円＝合計：約95兆円



感染症の大流行（パンデミック）

- **1918～1920年　スペイン風邪**
- 2003年　SARS
- 2009年　新型インフルエンザ
- 2014年　エボラ出血熱、デング熱
- 2015年　MERS、ジカ熱
- **2019年～　新型コロナウイルス**

約100年

- 将来

スペイン風邪（世界の状況）

- 1918年から1920年にかけて全世界で猛威を振るった新型インフルエンザ（H1N1型）の大流行（パンデミック）
- 感染：約5億人以上、死者：5,000万人から1億人

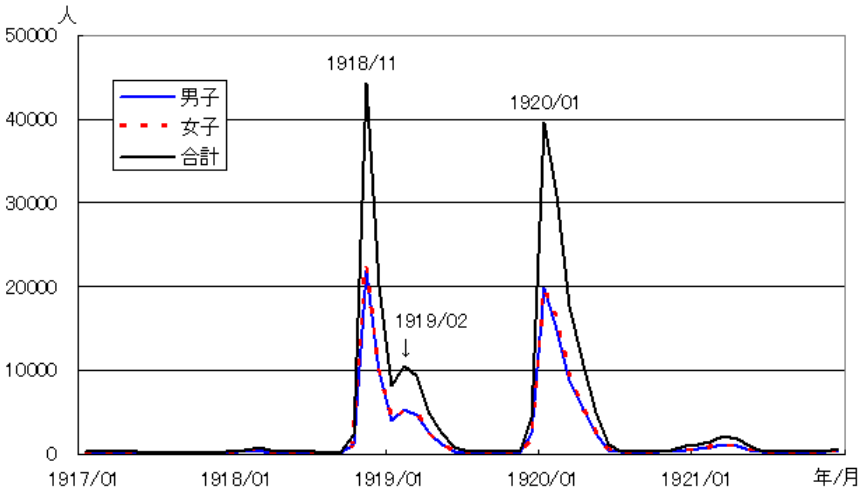
スペインかぜの患者でごった返すアメリカ軍の野戦病院

Wikipediaより

1918年：スペインかぜが大流行	世界で4000万人以上が死亡(当時の世界人口18億人)したと推定される
1957年：アジアかぜの大流行	世界で200万人以上の死亡と推定
1968年：香港かぜの大流行	世界で100万人以上の死亡と推定
2009年：新型インフルエンザ（A／H1N1）の大流行	世界の214カ国・地域で感染を確認、1万8449人の死亡者（WHO、2010年8月1日時点）

スペイン風邪（日本の状況）

- 流行期間：1918年秋～1919年春、1919年冬～1920年春
- 感染：2,380万人（国民の4割）、死亡：39～45万人



インフルエンザによる死亡者数の月別推移

『東京都健康安全研究センター年報』より

季節性インフルエンザの死亡者数
→ 214人（2001年）～1,818人（2005年）

超過死亡者数（間接的な死亡を含む）
→ 約1万人

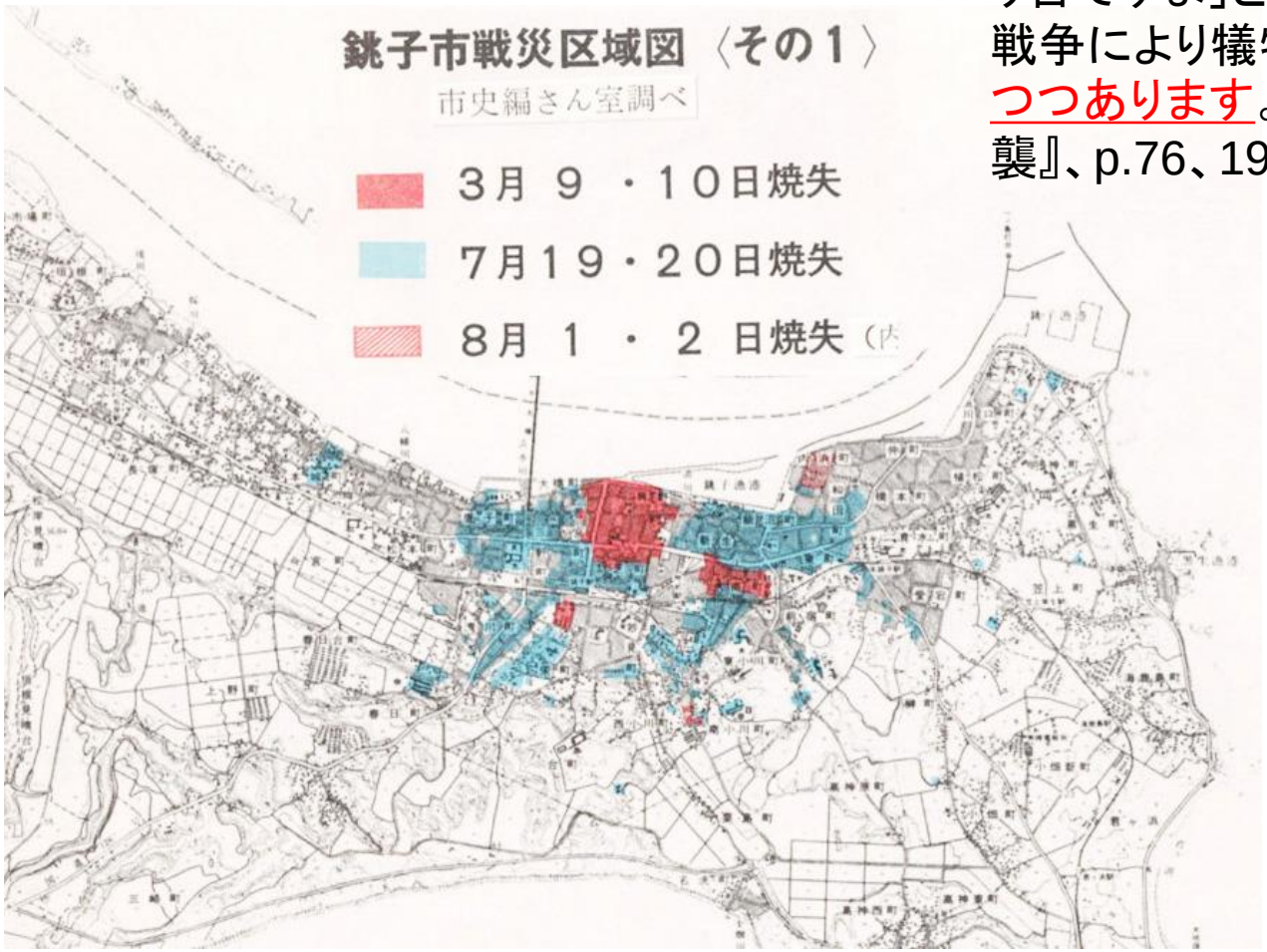
戦争・テロ

- 1894～1895年　日清戦争
- 1904～1905年　日露戦争
- 1914～1918年　第1次世界大戦
- 1939～1945年　第2次世界大戦
  （1941～1945年　太平洋戦争）
- 2021年
- 将来

約75年

銚子空襲

また本年七月二十日、家族の霊を弔いにお寺へ行きましたら、住職いわく「七月二十日の戦災記念日でも、朝から十二時の今まで、まだあなたでふたり目ですよ」と。これでよいでしょうか。戦争により犠牲死した人は、忘れられつつあります。（『市民の記録　銚子空襲』、p.76、1974年）



まとめ

- ３つの「防」（**防災**、**防疫**、**防衛**）に取り組んだ「濱口梧陵」の功績を通して、１．低頻度・巨大損失事象の体験・教訓の伝承、２．リスクマネジメントとクライシスマネジメント、３．自助・共助の重要性を、後世（少なくとも100年先まで）の国民にまで教育していく必要があると強く感じている。